

岩崎純一歌集		『新純星余情和歌集』>夏の部				
歌集名読み		しんじゆんせいよせいわかしふ				
作者		岩崎純一				
通釈・語釈		園井長光、長光たき、戸井留子、武田あさゑ、蝶子、沙月式部、雷吏少納言、岩崎純一(自釈)				
作者サイト		http://iwasakiunichi.net/				
和歌ページトップ		http://iwasakiunichi.net/waka/				
自撰日	夏の題	歌 岩崎純一歌	通釈	語釈	他歌人欄(評)	他歌人欄(派生歌など)
2008/4/1	扇	おのが葉を扇とまがひ木々に も水無月の照る日をいとふらし	自らの葉を扇と間違えるほど、木々さえも、「水が無い」という旧暦六月の照りつける日をいやに思っているに違いない。			
2008/4/1	扇	あつき日をあふぎのほどもかつ がつと身に染む秋の風に照る	暑い日を我慢し、そして扇を鳴らしている間にも、近づく秋の姿を知らせる風が身に染み、その風に月も照らし始めている。	◇掛詞「敢ふ×扇」		
2008/6/30	五月雨	幾返りこのすぢごとのさみだれ をわけてもやまぬこひちをぞゆ く	何度もこのひとすじひとすじの五月雨をかき分けても絶えることのない泥路を行くことだ。女の乱れた髪をかき分ける恋路のように。	◇掛詞「五月雨×さ乱れ」「泥×恋路」 ◇縁語「(髪)、すぢ、さ乱れ、分く」 「(雨)、すぢ、やむ、こひぢ」 ◇参照「黒髪の乱れも知らず」(和泉式部) 「かきやりしその黒髪の」(定家)	◆さみだれに濡れ泥濘の中を往還するさまが、辛い恋にはまりこんだ心象風景 ◆みこと言葉の綾織物といった印象を受け、溜息 ◆ただ、技巧に執されたあまり、やや強引な感じ (水垣久) ◆五月雨と泥沼を這うように進む女性の姿は淫かぶが、超絶技巧が心象風景を隔すか隔	
2008/6/30	紫陽花	夏衣ひとへにうつる月影をいく へに増すやあぢさゐの花	薄い夏衣の上に、今までは厚い衣の上に幾重にも映っていた月影が一重に映り始め、今度はその月影を幾重に増やして咲き増さってゆくのか、紫陽花は。	◇枕詞「夏衣→ひとへ」	◆集合花としての紫陽花の特質 (水垣久)	
2008/6/30	夏花、紫	ひともの白き面(おも)には色 深きねに泣かずまじ紫の花	たった一本の紫の花の白い顔には、その根のように深い色に染まるほどの音を上げて泣かずようなことはすまい。	◇掛詞「根×音」		
2008/6/30	夏花、紫	紫の深きゆかりのうれしさに花 の面さへ色づきて見ゆ	紫の花の深いゆかりの嬉しさに、白い花まで紫に色づいて見える。	◇参照「紫のひととゆゑに」(『古今』) 「紫の色こき時は」(在原業平『古今』)	◆野で出逢った可憐な花に託して、意中の人と結ばれた嬉しさを詠んだ歌 (水垣久)	
2008/6/30	夏草	夏の野は茂き草葉のなかなかに 花ごと色ををしまするかな	夏の野は、草葉があまりに茂っているので、その中に咲く花の一つ一つがなまじ惜まれることよ。	◇掛詞「中×なかなかに」	◆「なかなかに」の洒落た使い方と言い、夏草で花を隠してしまう趣向と言い、瀟洒な一首 (水垣久)	
2008/7/4	夏虫、蝶	かはひらこ引きやるからに白妙 の袖のはだけのけはひよそほ ひ	紋白蝶が殻を破った。するとすぐに、真っ白な、女が袖をはだけたような、美しい化粧と装いの姿が出てくるよ。	◇枕詞「白妙の→袖」 ◇掛詞「からに(すぐに)×殻に」 ◇音:ハ行 ◇参照『源氏物語 胡蝶』 舞楽『胡蝶』	◆女人の夜着からあらわれる肌(白粉で粧われた肌)のイメージ 意味を追うのでなく、言葉の調べに心を委ねるべき歌 (水垣久) 歌意よりも口調のうちに、蝶と女性の媚態嬌態を想像すべき不思議な歌。(武田あさゑ)	
2008/7/4	蛍	かがよひしかづらの影をかれゆ きて空に玉まき螢火の果て	蛍の光できらきらと輝いていた蔓植物の姿を離れ、空に玉をなす螢の行く果ての儚さよ。玉鬘の美しい姿を離れてゆく螢宮の心の傷よ。	◇頭韻:カ音 ◇参照『源氏』「螢」	◆源氏物語の忘れ難い名シーン ◆眼目は、玉鬘の名を「かづら」と「玉」に分割して、地・空の対称的な構図に配したところ ◆構図に詰め込んだ強引さは感じられるものの、描かれた情景はじゆうぶん魅力的なものになり得ていて、見事 (水垣久)	
2008/7/14	水辺夏	夏山のみどりに茂き川深く揺れ つつ潜(かづ)く月ぞ涼しき	夏の山の茂き緑色が映った川の底深く、揺れつつ潜ってゆく月が涼しい。	◇参照「能登川の水底さへに」(『万葉』) 「胡の浦の底さへにほふ」(『万葉』)	◆景に厚みがあり、動きもあるところに涼感を出そうとされた点、異色の作 ◆何処か歌枕の名を引っ張り出してみたくなった	
2008/7/14	水辺夏	水鶏(くひな)鳴く音(ね)をのみ 道に川島の水に分かれて散れ	水鶏の鳴声だけを道に交わす。人は誰一人見かけない。川の中にある島にぶつかっては分かれる水面に、月影も分かれ、散り乱れてい	◇掛詞「交はし×川島」		
2008/7/14	炎暑	玉響の歩みをとむる木陰だに葉 の間を貫(ぬ)きて敷ける日盛り	少しの間、歩みを止めて休む木陰にさえ、その木の葉を貫いて敷き渡る炎暑である。	◇縁語「玉、とむ、貫く、敷く」	◆斑点のように土に落ちている陽光を「敷ける」と言われた ◆「あまりに秀句にまつはれり」 (水垣久) ◆調子に張りがあったひたすらの暑さをよく表現した素晴らしい歌 (樂々) ◆「玉響に」でもよいだろう。(園井長光)	◆玉響に歩みをとむる木陰だに葉の間を貫きて敷ける日盛り(水垣久、樂々、園井長光、改作)
2008/7/14	鵜川	鵜飼ゆく川まで茂き夏山の青さ をやぶるかがり火の影	鵜飼舟が行く川にまで、茂き夏山が映る。その夜の深い青さをうち破って輝く、鵜飼舟のかがり火の影である。			

2008/7/18	首夏	よしさらば茂りゆかなむ山だに も朝ごと惜しき花の袂に	仕方ないことよ。それならばいっそのこと、山だけでも夏らしく緑に茂ってほしい。毎朝惜しくてたまらない、春の花との別れのような、女の袂と夜の床を待たずして、下着の紐が解けるだけでなく、私の体まで溶けてしまいたいような夏の暑さです。撫子の花、それは確かに「とこ」の名を持っていますが、真昼間から紐を解かれて咲くのは当然で、それはともかくとして、夏の目よ、私の体については夜まで待って下さい。			
2008/7/18	炎暑	夜を待たで身までとかれむ常夏の 花の紐には屋はともあれ	蝉の羽のように薄い一重の夏衣に移った女の移り香が色濃く匂う旧暦の五月、六月である。	◇掛詞「溶く×解く」「常夏×床」		
2008/8/9	夏衣	蝉の羽の薄きひとへに移り香の 色濃く匂ふ暁月水無月	現世の儂い身を知る涙を蛸も私も流し、そこに雨が降って秋を感じさせ、木々にそれぞれ交互に蛸の音が鳴き渡る。	◇枕詞「蝉の羽の→薄き、ひとへ」		
2008/8/9	蝉	空蝉の身を知る雨に秋かけて 木々にうつろふ蛸の声	俄かに蝉の羽を通り過ぎてゆく照り雨の降り落ちる音をよそに、繁く鳴き渡っている蝉の声々である。	◇枕詞「空蝉の→身」		
2008/8/9	蝉	忽ちに蝉の羽をゆく照り雨の音 (おと)をばよそに繁きもろ声			◆「蝉の羽をゆく」という表現には少し引っかかり ◆雨が蝉の羽を叩き、濡らしてゆくさまを想像しての謂 ◆幾重ものすだれを垂らしたように激しく降る夕立の形容 ◆ユニークな世界観を窺わせる一首 (水垣久)	
2008/8/9	夕立	神ごめに落つる白玉数知らず 八重の簾の夕立の空	雷と共に落ちてくる雨の白玉は数えきれず、何重にも重なる簾のようである夕立の空。	◇本歌取「八雲立つ出雲八重垣妻籠みに八重垣作るその八重垣を」(『記紀』)		
2008/8/24	納涼	雨やみて涼みに窓を開くるより 外面に同じ風の内方(うちかた)	雨がやみ、涼もうとして窓を開けたそばから、外の庭の涼しげな風が部屋の中に入ってきた。		◆「外」と「内」の対比に眼目 ◆熟さない表現をとられた意図？ (水垣久) ◆「内方」は近世語。江戸の庶民的情緒的一幕に思える。 (園井長光)	
2008/8/24	納涼	雨やみて蛸の音(ね)を吹く風の 色も涼しき夏の夕暮れ	雨がやみ、蛸の鳴き声を吹いてゆく風の色も涼しげな、夏の夕暮れの束の間。			
2008/8/24	晩夏	今日明日の薄き衣の形見とて 身に染むほどは吹かぬ涼風	数日もすれば衣替えることになる、今の薄着の形見として、身に染みるほど寒くは吹かない、晩夏の涼風よ。		◆形のない風が「形見」になるとは奇抜な着想 ◆やがて訪れる秋風の凄さを思わせ、余情	
2009/5/19	首夏	甕(もたひ)より酌み分けそめし 盃の面(おも)にうつろふ階(きざはし)の薔薇	甕から酌み分け始めた盃の酒の面に映る、そばの階段の薔薇。	◇参照「甕頭竹葉經春熟 階底薔薇入夏開」(『白氏文集』)		
2009/6/19	時鳥	夜をこめて待つより先に時鳥幾 たび我と聞かぬや忍び音	ほととぎすよ。我々人間は、夜が明けないうちからお前の鳴き声を楽しみに待ってきたが、我々の目が覚めないうちに、お前は自分の鳴き始めの忍び音を何度聞いてきたのか。			
2009/6/19	夏夜	風も涼し真砂(まさご)の数に散 りまがふ月の光は夏の夜の霜	風が涼しい中、地面に砂の数だけ散り乱れている月の光は、夏の夜ながら、冬の霜のようだ。			
2010/8/18	蝉	人とはぬ夏の日暮らし我が袖は ひとへに薄き蝉の羽衣	人も訪れない家に蛸が鳴く、夏の日の暮らし。私の薄着の袖は、ひたすら薄き蝉の羽のようです。	◇掛詞「日暮らし×蛸」「偏に×一重に」 ◇縁語「袖、ひとへ、薄し、衣」「蛸、		
2010/8/18	蝉	蝉の羽の左右も濡らす雨心の 果てに音のみぞ鳴く	蝉の左の羽も右の羽も濡らす雨。蝉が鳴くように、私も、あの人に来てくれない寂しい心の果てに、泣き声を上げる。			
2010/8/18	蝉	鳴く蝉の羽衣薫る風の上になび かぬ人のよその東雲	鳴く蝉の羽が夏の匂いの薫る風に吹かれ、私の着物の袖もなびくけれど、遠くにいるあの方は私になびかない、この明け方の空。		◆前作「蝉の羽の～」と共に、ほとんど恋歌の趣で、我が身を蝉になぞらえる女の、叶わぬ恋に対する遠望。(戸井留子)	
2012/9/17	晩夏	ゆく夏よ光さかりは昔にて水面 (みなも)寂しく照る夕日かな	ゆく夏よ。光の盛んだった時をもう昔として、夏の最後に水面に寂しく照る夕日よ。			◆「伝統和歌+CG画像」の試み(1)